



JORDAN

## 「異国の生活、文化を知る」 / 「難民を知る、考える」

古賀 有史

聖徳学園小学校

担当教科: 英語・算数

時間数: 2・4年生 = 2時間

5・6年生 = 5～6時間

対象生徒: 2・4・5・6年

対象人数: 各学年2クラス編成 1クラス 32名

### カリキュラム

#### (1) 実践のテーマ

日本とは異なるアラブ・イスラム文化の国の生活を受容的に知る。  
高学年においては、加えて「難民」について知り、考える。

#### (2) 実践のねらい

2・4年生 「楽しみながら異国の生活、文化を知る」  
5～6年生 「『難民』を理解し、どう援助できるか考える」

#### (3) 授業の構成 (2・4年生は2時間目まで。5～6年生は4～6時間目まで。)

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1時間目 テーマ = 「ヨルダンという国を知っていますか？」 ねらい = 「ヨルダン」について基本的な情報をガイダンス	パワーポイント・プロジェクトを使いながら、ヨルダンの文化と生活を紹介していく。	世界地図 カフィーヤ アラビア語数字の文字盤の腕時計
2時間目 テーマ = 「ヨルダンクイズ」 ねらい = 3択クイズ形式を通して楽しみながらヨルダンについて知る。	パワーポイントで作成した3択クイズに、班ごとに取り組む。班で話し合いをさせて、答えをひとつに絞らせる。	死海の水 アザーン時計 現地で録音した実際の「アザーン」
3時間目 テーマ、ねらいは「2時間目」とほぼ同じ。ただし、後半のクイズは解答に理由を考えさせる。	解答を勘だけに頼るのではなく、その理由や前後の問題との関連についても考えさせる。	同上
4時間目 テーマ = 「難民とは？」 ねらい = 「難民」とはどういう人たちかを知る。	難民の子どもが描いた「ポスター」を提示して、その絵からわかること、気づくことを子どもたちに考えさせる。 絵本の読み聞かせを通して、難民について知らせる。その後、難民の発生、定義について考える。	UNHCRからの難民の子どもが描いた「ポスター」 絵本『せかいでいちばんうつくしいぼくの村』(小林豊著 ポプラ社)1995
5時間目 テーマ = 難民の「実際」 ねらい = 難民の疑似体験や実際の声を聞くことから、難民に対する理解を深める。	班ごとに家族となり「難民になって逃げる」の活動に取り組む。 ビデオ視聴し、難民の子どもたちの生の声を聞くことで、自分たちと同年代の子どもたちの中には、生きていくことに極めて困難を抱えている状況にある人たちがいることを知る。	「難民になって逃げる」 UNHCR制作のビデオ「難民になるってどういうこと？」

<p>6時間目          テーマ = 難民への「援助」          ねらい = どんな方法があるか考える。また、日本は困難を抱えた国にどんな援助をしているか知る。</p>	<p>日本がJICAなどを通して、貧困国、困難を抱えた国に対して、様々な援助をしていることを伝えるとともに、その援助にもいろいろな方法があることを知らせる。その上で、子どもたち自身にどんな援助、支援、応援の方法があるか考えさせる。</p>	<p>ラワンさん(ヨルダン)の紹介文(現地で取材)          アクションプランシート</p>
--	---	--

上記の授業の他、次の3点を実践として付記する。

11月の授業参観日より、プレイルーム(子どもたちが休み時間等にゲーム等で遊ぶ部屋)において、「ヨルダン展」を約10日間展示。現地で撮影した写真18点をA4サイズに伸ばしパネル展示をし、そこに解説文を加えた。これは、それぞれの授業で同様の授業展開(1~2時間め)を計画しつつも、そのクラスの実態や、子どもたちの反応の流れから予定していた「紹介」ができなかったものを相互に補完するためのものであり、また、授業参観日において全校の保護者が来校することから、保護者にも今回の研修と、その授業の一部を知ってもらいたいと考えたためである。



「ヨルダン展」の展示の一部

3学期、5年生は英語の授業において「Children around the world」というテーマを学習する。これまで、マレーシア、中国、ニュージーランド、ネパール、タイなどいくつかの国を取り上げ、その国の子どもたちの生活を簡単な英語で学んだ。教材の原典としてユネスコアジア文化センターの『Can you find me?』(ユネスコ・アジア文化センター 1998)を使用している。今年度は、ヨルダン研修、取材から得た祖母にパレスチナ難民を持つラワンさんを題材に教材化する。

の授業に先立ち、2学期12月15日(金)にサウジアラビア人のバシャーールさん(サウジアラビア大使館勤務、八王子モスク主宰)を学校にお招きして、5年生を対象に「アラブの国」「イスラム文化」といったテーマで出張授業をしていただいた。バシャーールさんには日本とは違うイスラム文化やアラブの生活を話していただきました。また加えて、人間にとって流れている気持ち、感情はどここの国も同じなんだということを子どもたちに強く訴えておられました。

の教材化、「ラワンさん」の紹介



5年生に授業をするバシャーールさん



### 1時間目 「ヨルダンという国を知っていますか？」

世界にはいくつ「国」があるか子どもたちに聞く。「100、200、もっと・・・」と声があがる。高学年で知識のある子どもたちの中には(国連加盟国の)191だとか、最近192になったとか、細かな数字もあがる。しかし、ここではだいたいにおいてどれも正解。国は新しく生まれたり、なくなったりしていること、国によっては他国から認められていない場合もあること、などを紹介する。

今回、縁があって「ヨルダン」という国を訪れ、そこでは日本とだいぶ異なった生活習慣があったこと、意外にも同じと思うことがたくさんあったことをこれから紹介したいと考えているが、世界におよそ200前後の国がある中で、たまたま「ヨルダン」を訪れたのだから、授業者の私は子どもたちに「ヨルダン博士」や「ヨルダン通」になって欲しいわけではないことを1番はじめの授業の冒頭に話した。加えて、低・中学年に

おいては楽しみながら、日本とは違う、別の国の暮らし方について知ってほしいと話した。高学年では、数回予定している授業の最後に、みんなに考えてもらいたいことがあると話した。

まずはじめは挨拶から。授業で英語を取り入れている本校の子どもたちは授業者が「good morning」と声をかけると、「good morning」と返してくる。「おはようございます」と言えば「おはようございます」。「アッサラームアレイコム」と声をかけると「アッサラームアレイコム」と少々自信なさそうではありましたが返してくれました。アラビア語の挨拶は、ちょっと違って返すときは「ワレイコムアッサラーム」だよと話すと、わりとすんなり理解してくれました。アラビア語は難しいけど、どの世界にも共通するものがある。それは「数字」！と思ったら、ヨルダンでは数字までが表記が違っていたことを話し、実際に黒板に0～9までの数字を書くと子どもたちはびっくり。とりあえず、アラビア語数字で足し算をやってみますが、小学校1年生レベルの足し算や簡単な九九でも問題を理解し、解答を表記するにはみんな大変苦労していました。

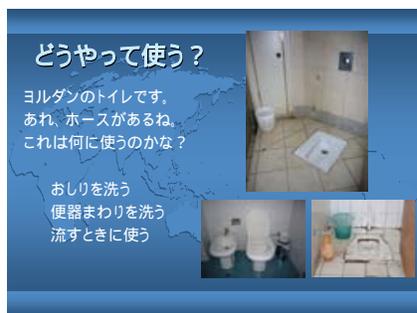
さて、そのヨルダンという国はどこにあるのでしょうか。世界地図をプロジェクターで提示しながら、アラブの民族衣装を着て見せます。頭にはカフィーヤ、服装は足元まであるロングのシャツ。勘のいい子どもたちは「暑い国」を想像して赤道付近をさがします。さらに鋭い子どもは「砂漠」のあるところを探していました。そして、どうしてこういった服装をしているのか、いろいろと想像を意見として言ってもらいました。また、この衣装のイメージってどんな？と聞くと、「石油王」「お金持ち」「アラビアンナイト」「アラジン」などのほか、高学年では「イスラム教」「アッラー」「ムハンマド」「テロ」といった言葉も聞かれました。

スライドでヨルダンのある学校に掲示してあったポスターを見せます。アラビア語は読めませんが、イラストや絵は大変ヒントになるもの。ひとつめは「水を大切に」、次は「献血に協力を」と想像ができます。が、トイレの男女はイラストがないと大変！五感を働かせてもどちらが男用か女用かわかりません。識字の大切さと同時にユニバーサルデザインの必要性もここで分かりました。



高学年では、この先の授業があるので提示しませんが、低学年は時数に限界があるので、ここでトイレの紹介をしました。いわゆるアラビア式トイレです。実際に訪れた様々なトイレの中から3つを取り出し、スライドで提示、さあこのトイレ、どうやって使うのだろうと子どもたちに聞きます。「このホースは何だろう」「ごみばこがある」「(日本と同じように)フ

### 識字って大切！



ツに使用ばいいんじゃない」と声があがります。日本と違って、ヨルダンは水が少なくそのため水圧がかからないため「紙」を流せないんだよ、と話すと「え～じゃあどうすんのー？」の声があちこちに。さあ、どうするのでしょうか？ヨルダンは日本よりもずっと前からウォシュレットだったそうだよ。とヒントを向けると、「ホースはお尻を洗うため」と気づく子どもが出てきます。しかし、その後の処理についてはなかなか想像が及ばない様子。結局、使い方の詳細を話すと、自分の手でお尻をきれいにすること、紙をごみ箱にすてることなど、その意外性にただただビックリする子どもたちでした。

自分でお尻を洗うことには抵抗がある様子

1 時間目はだいたいここで終了。子どもたちに

は「ふりかえりシート」を配り、今日の話で一番印象に残った話、またはもっと聴きたかった話などを書いてもらいました。一番はやはり「トイレの話」。その他には詳細を記述しませんでした。が、「食べ物の話」「遺跡の話」などをもっと聴きたかった様子でした。

### 2・3時間目 「ヨルダンクイズ」

班ごとに3択クイズで楽しみながらヨルダンを知ってもらいます。最高得点の班には「ヨルダン特製のスペシャルジュース」が優勝賞品と伝えながら。(この正体は「死海の水」)

パワーポイントで提示した「ヨルダンクイズ」(抜粋)

低学年1

町にたくさんの羊が・・・



首都アンマンの郊外で、たくさんの羊を見つけました。これは・・・

野生の羊がまだいる  
これは家畜  
ヨルダンではたくさん  
の羊を飼うのが流行り




低学年2

あら、不思議？



ヨルダンには「死海」という海があります。ここではおぼれることができません。みんな浮いてしまいます。なぜでしょう。

実はここが先生、おしりは底についている  
この海水は塩分が濃い  
ため  
この海水には、フッ素(浮素)が含まれているため

低学年3

この家の旗は何？

6・7・8月になると、ヨルダンでは屋上に写真のような旗のある家がたくさん見られます。これは何でしょう？



近々、結婚式がある家  
大学進学が決まった家  
赤ちゃんが生まれた家

低学年4

何をしているのでしょうか？

午後2時を過ぎると、カフェはおしゃべりを楽しむ人で込み合います。この人たちがのんでいるのは何？



ヨルダン地方のお酒  
特殊なたばこ  
特殊な炭酸水(ジュース)

高学年1

町で出会った子どもたち



高学年2

なぜでしょう？



これは、町を走るバスです。でも、なかなか発車しません。なぜでしょう？

お客さんがまだ乗れる  
運転手さんの気まぐれ  
発車時刻まで待っている

高学年3

えっ？ ないの！？

ヨルダンの生活で、えっ？これがないの？というものがあります。それはどれでしょう。



住所  
苗字(ファミリーネーム)  
携帯電話

高学年4

なぜでしょう？

ヨルダンではオリーブの栽培が盛んです。下の写真の石囲いは何のためにあるのでしょうか。



ヒント  
オリーブ畑は山にある  
土は砂岩のようです  
大変乾燥した地方です



保水のため(水を蓄えるため)

クイズは低学年用と高学年用を用意しました。共通に出題したのものもありますし、それぞれのみの出題もありました。パワーポイントで作成したクイズをプロジェクタでスクリーンに投影しながら問題を出していきます。答えはほぼすべてが3択式で、班の仲間で話し合って答えを考えます。高学年では、ただ勘に頼るのではなく、その答えに理由をつけさせてみたり、既出の問題にヒントがあることなどを付け加えました。答えが出揃ったところで、正解を提示し、その問題にまつわる周辺のお話をしていきました。問題は「トイレ」「食事」「交通」「たばこ」「お祈り」「お店」「ベッドウィン」「郵便」「服装」「遺跡」など多岐にわたって作成しました。クイズの最後に「授業のふり返し」として「印象に残ったお話」「もっと聞きたかったこと」「疑問に思ったこと」などを自由に書いてもらいました。以下、子どもたちの「ふり返し」です。

## 2年生のふり返しから

女の人が顔やかみのけをかくすことがびっくりでした。  
ヨルダンの食べ物がとてもおいしそうで行ってみたいと思いました。  
死海で体が浮くのは不思議だと思いました。浮かんで寝てみたいと思いました。  
豚肉はおいしいのに、どうして食べないのかなと思いました。  
トイレの使い方が違うことにびっくりしました。使ってみたいです。  
ヨルダンの生活は、(日本と)にている点もあり、まったくにいていない点もあることがわかった。  
バスの出発の仕方がふしぎだった。  
1(まわりで)せんそうをやっている国とかの真ん中にあるのに、ふつうのくらしをしているなあとかんしんした。  
女の子があまり外であそんでいないのがふしぎだった。  
さばくの様子を知りたいです。  
数字はどんなふうに読むのかなと思いました。  
子どもたちはどんな勉強をしているのですか。また、どんな遊びをしているのですか。  
ヨルダンの「おはか」ってどんなのですか。  
ヨルダンにはどんな生き物がいますか。  
日本より便利なものはありましたか。  
都会的でしたか、いなかでしたか。  
日本にない食べ物はありましたか。

## 4年生のふり返しから

夏なのに長袖だったことがふしぎでした。  
アラビア語数字はややこしい。国土の80%がさばくであることに驚いた。  
魚があまり食べられないことが印象に残りました。  
遺跡がすごいなあとと思いました。  
2 貧しい国だと思っていたけど、食べ物がいっぱいあったり、車もあった。  
3 まわりの国ではどうして戦争をしているのでしょうか。  
4 水がない国なのに、水が安いのでびっくりした。  
遺跡の様子を見て、昔の人は頭がいいんだなあとと思いました。  
建物の多くがブロックを積み上げてできていることにびっくりしました。  
5 戦争をしている国に囲まれていることに驚いた。

## 5年生のふり返しから

スターバックスが1店舗しかないことにおどろいた。  
どんな虫がいましたか。  
ヨルダンのお金はどんな形をしていますか。  
セブンイレブンはないのですか。  
6 町の様子は日本と変わらないと思いました。  
7 貧しい国だと思っていたけど、意外にそうでもないと思いました。  
2000年前の遺跡が残っていることにおどろいた。  
ピタパンはどうやって作るのかなあとと思いました。  
スターバックスは売れているのか。(お客さんが入るのかなあと考えた)  
8 アラビアというと、日本人にはラクダと砂漠という印象しかないのでおどろきました。

ペトラ遺跡では、あんなに高いところの岩をどうやって削ったのか不思議でした。

### 6年生のふり返りから

9観光客が来れるように第3次産業を発展させましょう。

世界遺産をそのままにしてあることにおどろいた。

服装に意味があることがわかりました。

ナンバープレートが6ケタもあったのにおどろいた。

数字は全国共通だと思っていたけれど、アラビア語数字があることに驚いた。

10アラビア人は少し変わっているという印象が変わったこと。

11私が外国に行ったとき、私たち日本人を差別するような目で見ていました。先生はそういう思いをしませんでしたか。

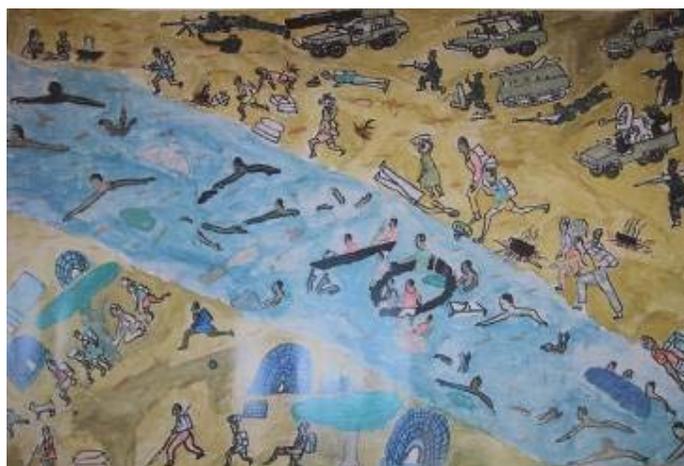
アラビア人はみんな先生が着ていたような衣装をしているのかと思ったら、スーツを着ている人もいておどろきました。

「ヨルダンクイズ」を授業者自身がふり返りますと、意図したわけではありませんが、ヨルダンやアラブの「日本とは違った生活」や「日本人とは異なった感覚」ばかりが強調されがちな面も多かったように反省もありますが、子どもたちの「ふり返り」の中からは、子どもたち自身でいろいろな発見があったり、新たな疑問に気付いたりしていることが分かります。1や2、6、7では、周辺で戦争をしていたり、(日本と比べて)「貧しい」という印象を持っていても人々の暮らしは自分たちとそんなに変わらないことを感じています。また、さらにそこから発展して5や3のように戦争に対してあらためて意識を向けられた子どももいたようです。子どもたちに「経済」の話をする時間がなかったのであまり触れられませんでした。4のように「水」問題に素朴な疑問を抱いた子どももいました。8のように固定化されたイメージに新たな印象を与えることもできたと思います。6年生の10では、自分自身のアラビア人観が変わったと自覚できる子どももあり、またそれを振り返りで書けたことは嬉しい限りです。9のように、その国の発展課題を見つけた子どももありました。11の質問には、十分時間をとって取り上げ、子どもたちと一緒に考えたい事柄でした。(時間がなく、取り上げられていません)

最後の11だけでなく、途中まで授業をして子どもたちから出された感想、疑問、質問などをそれ以降の授業にもっと取り上げられたらよかったとすべての授業を終えて思いました。

### 4時間目 難民とは

UNHCRから頂いたスーダンの難民の子どもが描いた絵をプロジェクトで提示し、その絵から分かることを自由に言ってもらいました。「戦争の絵」「川をわたって逃がっている」といった一見して分かることから、しばらく発言が止まります。もっとよく見て欲しい、もっと気付くことがあるはずだ、と声をかけると子どもたちはさらに絵を凝視し、「逃がっている人は川原でキャンプをしていたようだ」「テントやかまが見える」「逃がっている人は普通の服を着てるけど、追っている人たちは軍人だ」などが出てきます。ここで「では、一般の人はなぜ川原でキャンプ



生活しなくてはならず、また軍人に追われているのだろう」と問いを向けました。多くの意見は出ませんが、中には「民族の戦い」「宗教上の理由」といった言葉も出ました。理由はさまざまだが、自分の住んでいた場所を追われ、生命の危機に直面しながら、安全を求めて避難生活をしなければならない人達がいることを子どもたちに伝えます。プロジェクトはそのままに、絵本の読み聞かせをしました。小林豊さんの描いた「せかいいちうつくしいぼくの村」(ポプラ社)。アフガニスタンを旅して描いたというこの絵本は美しい村に住むひとりの少年の物語ですが、最後のページは「このとしのふゆ 村はせんそうで はかいされ いまは もうありません」という悲しい言葉でとしています。スーダン難民の子どもポスター、小林豊さんの絵本の二点を紹介したところで、難民という言葉とその意味するところについて話しました。



以下、子どもたち(5年生)の「難民を援助するアクションプランシート」から

1ヶ月でできそうなこと

手紙を送る(友だちになる、励ます)、サッカーボールを送る、靴や衣類を送る、難民の生活の大変さを知る、1週間難民の気持ちになってみる、難民を知る、その貧しい国の状況について調べる、難民について知ったことを広める、無駄遣いをしない、難民について勉強する

10年でできそうなこと

生活に必要なものの寄付、ODAの増強、学校を建ててあげたい、難民支援税をつくる、スポーツを広める、病院を建てる、先生の派遣、子どもたちの遊び場をつくる、難民について周りの人に教える

20年でできそうなこと

実際にその国に行ってみたい、ODAの増強、戦争を終わらせることに協力するボランティアをする、外国と交流できる仕事について直接でなくても援助する

子どもたちは、10年、20年先よりも「今」についての方が想起しやすいようでした。「1ヶ月でできそうなこと」の中で一番多くあげられたのは「難民について知る」といった内容でした。この種の回答は言葉は多少違いますが多数、複数見られ、今回の「難民を知り、考える」というテーマに近づけた様子です。また、「10年」「20年」についても、多くの回答が見られたわけではありませんが、募金や寄付といった援助に留まらず、より具体的な提案や間接的な支援の提案が見られたことは、子どもたちの考える「支援のあり方」にも広がりがあったものと見ています。

最後になぜ日本は援助するのか、という問いを向けてみました。こちらの命題においてもあらかじめ「日本は裕福だから」以外で考えて欲しいと声をかけました。私としては「共生」の概念に近づいて欲しかったのですが、この命題は授業数が十分に確保できなかったことも含めて、小学生には少々難しかったようです。授業を参観していた同僚からも「期待が高すぎるのでは」とご意見を頂きました。この点については、今後さらに考えていきたいと思っています。



JORDAN

## ヨルダンの国を通して異文化・難民・自分たちとの関わりについて考える

### 関根 真理

啓明学園中学・高等学校

担当教科:国際理解

実践教科:総合学習

時間数:11時間

対象生徒:6年生

対象人数:62人

### カリキュラム

#### (1)実践の目的

ヨルダンの人々の暮らし、難民キャンプの人々の暮らし、考え、生活と宗教の関わり、抱えている問題などを知る。

ヨルダンを通して、「難民」の人々の気持ち、生活、抱えている問題点について学ぶ。

世界には、多くの難民がいること、そしてどの様に受け入れられているかを知る。日本の受け入れ状態を知る。

難民の人々の生活を知ることによって、同じ地球上に生きる者としての自分との関わりを見つける。

グループ活動を通して、お互いの考えを共有する。気づいたこと、出来ることをグループごとに発表する。振り返りをして全体で共有する。

#### (2)授業の構成

時限	方法	教材・資料
1～2時限	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヨルダンの文化、生活の様子を知る</li> <li>・ヨルダンクイズ</li> <li>・ラワンさんの選んだ道を通して、考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヨルダン周辺地図</li> <li>・国旗 ・パワーポイント</li> <li>・アザーンテープ ・ コーラン</li> <li>・イシャール ・ カブール</li> <li>・死海の水 ・ワークシート</li> </ul>
3時限	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヨルダンの難民キャンプの様子</li> <li>・パレスチナ人とその歴史を学ぶ</li> <li>・振り返りを書く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヨルダン周辺地図</li> <li>・国旗</li> <li>・パワーポイント</li> <li>・振り返りシート</li> </ul>
4～5時限	<ul style="list-style-type: none"> <li>・難民の人々の思いを実感してみる(疑似体験)</li> <li>・それぞれの場面でどのように感じたかをまとめる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・難民になって逃げる(疑似体験アクティビティ)</li> <li>・振り返りシート</li> </ul>
6～7時限 (予定)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本に住んでいる難民の人々について調べる</li> <li>・調べたことについて話し合う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インターネット</li> <li>・UNHCRの資料</li> <li>・難民支援団体の活動</li> </ul>
8～9時間 (予定)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・雨宮 剛氏から、日本にいる難民の人々及び難民申請をしている人々についての話を聞く</li> <li>・振り返り</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・雨宮 剛氏の話</li> <li>・振り返りシート</li> </ul>
10～11時間 (予定)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・難民と自分との関わりについてグループで考える。</li> <li>・意見を発表する。</li> <li>・振り返りを書く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・振り返りシート</li> </ul>

## 授業の詳細

### 1 & 2 時限目

#### \* 目標：ヨルダンの人々の暮らしについて知る

ヨルダンの人々の暮らしをパワーポイントの映像を通して学んだ。アンマン市の様子、遺跡(アンマン城・ペトラ)、死海、田舎と都市の違い、荒地、飲食物、服装などを紹介した。最後にJICAに務めている女性・ラワンさんについて紹介した。ラワンさんは優秀な女性で大学を出た後、銀行に勤めたいと思っていた。しかし、銀行で勤めるには「グローバルスタンダード(世界共通の規範)」に基づいて“イシャル”(頭にかぶるスカーフ)を取ることがヨルダンでは決められていたため、自分の夢を断念した。この事について、どのように思うかを意見交換し、その後ワークシートに書いた。



#### \* 生徒の反応

中東に対して、知識があまりなかったので多くの児童がヨルダンの人々の生活や文化について興味を持った。特に1日に5回、モスクに行き祈ることやコーランに書かれているアラビア文字とデザイン、「アザーン」の音など、不思議に思ったようだ。お茶のポット、水たばこ、丸いパン(ホブス)、頭にかぶるスカーフ(カブールとイシャル)なども初めて知る事ばかりで驚いていた。また、死海の水を舐めてみて、普通の海水と違い、塩と苦みが強いこと知って驚いた。また、聖書に出てくるヨルダン川や砂漠や荒野も映像を見て、その様子を実際に知ることが出来た。ヨルダンは日本と色々な意味で違うことを知ることが出来た。



自分の信仰を守るために、銀行で働く夢を断念したラワンさんの決断については、以下の様な意見があった。

- ・ 宗教が一番なんて、私ならず無理なことです。
- ・ イスラム教は規制がありすぎるんじゃないかと思いました。本当にルールを守って偉いと思いました。
- ・ 正直、変だと思った。でも、小さい頃から洗脳されたらそうなるのは、仕方ないし、自分で決めたことならそれで良いと思う。
- ・ ラワンさんは、勇気がある人だと思います。
- ・ イスラム教を誇りに思っているなと思った。
- ・ 宗教の違いや物事の考え方によって、ここまで価値観が変わってくることを思い知らされました。

### 3 時限目

#### \* 目標：ヨルダンの難民キャンプの様子とパレスチナ難民について知る

ヨルダンの人口の7割がパレスチナ難民であること、この50年間でヨルダンの人口は10倍に増加したこと。どうしてこのような状況となったかを歴史を通して学んだ。

#### \* 生徒の反応

- ・ とにかく難しい歴史だということがわかった。
- ・ 複雑すぎてわからない。
- ・ どちらにも言い分があるのかもしれないけど、長い間住んでいた自分の国から追い出されるのは大変だ。
- ・ ヨルダンは難民を受け入れて、国民として認めてあげるのすごい国だと思う。

### 4 & 5 時限目

#### \* 目標：難民の人々の思いを知る。

難民の生活の体験を、「逃げる」アクティビティを通して行った。(新しい開発教育のすすめ方!! 難民)

#### \* 生徒の反応

- ・ 不自由な生活は私達には無いので、難民は苦しい生活をしていると思った。
- ・ 難民の生活は、平和な国では考えられないほど苦しいことがわかった。

- ・ いつ誰が病気になり何が失われるかわからない恐怖は、難民でしか味わえないのかもしれない。
- ・ 難民キャンプに住んでいる人達は、選ぶこともできず、小さな世界しか見えないのでかわいそうだと思った。
- ・ 難民って、国が勝手に起こしたのに、それに巻き添えになる犠牲者だと思う。
- ・ この世界には何百万人と難民がいるけれど、そこでがんばっている人がいるから、バカにはしていないと思った。
- ・ 戦争や武力がなければ、難民なんかいなかったのにと考えた。
- ・ 難民の人達のことをもっと知って、近くにそういう人がいたら助けてあげたいと思った。
- ・ 難民の人のつらい状況を忘れないで、他の人達にも伝えていきたい。

#### **6 & 7時限目** 3学期に実践の予定

**\*目標：日本の難民の人々について知る。**

日本にも難民の人々がいることを調べる。また、日本の受け入れの現状が他国に比べるととても少ないことを知る。なぜ、このような現状が起きているのかを考える。

#### **8 & 9時限目** 3学期に実践の予定

**\*目標：難民の人権について知る。**

**難民や外国人にとって住みやすい国とは、どのような国であるかを考える。**

現在、日本で難民支援をしている雨宮剛先生(青山学院大学名誉教授)を学園に招いて、実状を話していただく。雨宮先生は、2004年から難民支援運動をされている。現在モイラン青年ジャマルさんを難民と認定するように支援運動をされている。

#### **10 & 11時限目** 3学期に実践の予定

**\*目標：自分達と難民の人達の関わりについて考える。**

自分たちの住んでいる日本にも難民の人達がいること、難民の人々が抱えている問題を知った上で、自分達との関わりを考える。どんなことができるか話し合い、発表する。

#### **所感・反省点**

継続して授業をしたかったが、2学期は運動会、学芸会などの学校行事が多かったので、時間を確保するのが難しかった。しかし、日本から遠く知識があまりない中東の国、ヨルダンを児童に紹介できたことはとても意味があった。また、人々の生活の様子や考えを紹介することによって、同じ地球で生きるヨルダンの人々や難民について考える機会が持てた。ヨルダンで撮った写真や持ち帰ったアザーンテープ、コーラン、イシャー、マンディール、死海の水や泥、ペトラの砂などがとても役に立った。やはり、五感で感じることで児童は身近に感じる事が出来る。ラワンさんの決断については、高校1年生にも同じテーマを扱ったが、違った意見が出ておもしろかった。ヨルダンの難民について学ぶ際に、パレスチナの歴史を知ることは大切だと思い3時限目に授業をしたが、大人でも理解をするのが難しい内容を児童にわかりやすく伝えるのは、とても大変だった。ヨルダンの国の特殊性である全人口の7割が難民であることを理解するには、その背景に長い複雑な歴史があるからだということを知らせたかった。4,5時限では、「難民になって逃げる」という疑似体験を行ったが、このアクティビティをすることによって、難民の人々の苦労や気持ちを以前より実感することが出来た。ヨルダンを訪問した際に、JICAの職員の方から聞いたことだが、「難民としてどこに逃げたか」また「どこの国に受け入れられたか」によって、その後人々がどのような生活をするかが異なって来るということにも視点を置いた。これから予定されている授業では、難民の人々は日本にも在住し、難民申請をしている人々も多数いることを知らせたい。日本は難民支援国としては、他の先進国とは違い、世界で130位ぐらいであることも知らせたい。また、雨宮先生が語っておられる「難民や外国人にとって住みやすい国とは、日本人にとっても住みやすい国だ。」ということについても、具体的にどんな国であるべきかを児童と共に考えていきたいと思う。

## 今後の改善策

ヨルダンの難民について理解するためには、パレスチナの歴史を伝える必要があると思うが、今後はもっとわかりやすく伝えるための工夫をしたい。可能であれば、継続的な授業が出来るように学年の先生と協力して行きたい。

## 参考資料

「新しい開発教育のすすめII 難民」開発教育研究会編 古今書院 2000年

「みな同じ地球の子 祖国は難民キャンプ」ジュディ・クミン著・小林正典写真 ポプラ社 1999年

「世界難民地図」アジア福祉教育財団 難民事業部 2003年

### ヨルダン女性の“イシャル”を通して「グローバルスタンダード」とは何かについて考える

実践教科:地理

時間数:4時間

対象生徒:高校1年生 国際生

対象人数:12人

## カリキュラム

### (1)実践の目的

高校1年生の地理の国際クラスの生徒を対象に授業を行った。このクラスは、12人という少ない人数だが、長期海外に住んでいた帰国生が10名、その他2名は両親のどちらかが外国籍という海外経験が豊かなクラスだ。しかし、生徒の中には、中東に滞在した経験がある生徒は一人もいない。そこで以下を実践の目的とした。

ヨルダンを通して中東に関心を持つ機会を作る。

生活習慣、宗教と人々の暮らしについて考える。

イスラム教の女性が外出する時に頭にかぶる“イシャル”を通して、国際的な規範とされる“グローバルスタンダード”とは何かについて考える。

国際協力について考える。

### (2)授業の構成

時 限	方 法	教 材 ・ 資 料
1時限	・ヨルダンの地理的位置を確認する。 ・ヨルダンについてイメージを付箋に書き出し、模造紙にまとめる。	・ヨルダン周辺地図  ・国旗 ・ブレンストーミング
2時限	・パワーポイントを用いて、実際のヨルダンの様子を見せる。 ・クイズを通してヨルダンについて知る。	・パワーポイント ・死海の水 ・ヨルダンクイズ
3時限	・生活習慣、宗教と人々の暮らしについて考える。 ・一人のヨルダン人女性の決断を通して、「グローバルスタンダードとは何か」について考える	・パワーポイント ・アザーンテープ ・マンディーール(男性用のかぶり物) ・イシャル(女性用のかぶり物) ・ワークシート

4時限目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヨルダンの抱えている問題について考える。</li> <li>・青年海外協力隊の活動について知る。</li> <li>・振り返り</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パワーポイント</li> <li>・ワークシート</li> </ul>
------	--	---

## 授業の詳細

### [1時限目]

ヨルダンの地理的確認をした後、国旗の意味について考えた。その後、ヨルダンについて知っていることやイメージをブレンストーミングしてそれぞれが、付箋に書き出し、最後は一枚の模造紙にまとめた。イメージには、深い歴史、文化、宗教などが厳しそう、イラクやイランに似ている、イスラエル、エジプトなどとの関係がある、アラビア、ヨルダン川、聖書に出てくる、イスラム教、暑い、乾燥している、涼しい、暗い、静か、派手じゃない、砂漠、貧しい、色でいうと茶色、羊、ラクダなどが出た。ヨルダンについては、ほとんどの生徒は、知識がなく漠然とするものだった。

### [2時限目]

事前に持っていたイメージが、実際とどう違うかをパワーポイントの映像を見ながら確認した。風景として、アンマンの住居の様子、ダウンタウン、高級デパート街、アンマン城、土漠、荒れ地、死海及びペトラを紹介した。死海の説明では、持ち帰って来た死海の水を少し舐めてもらい、普通の海水とは全く違うことを確認した。ヨルダンに住んでいる人々としては、ヨルダン王と王族、ベドウィンの人々、一般の人々及び難民キャンプに住んでいる人々を紹介した。最後は、色々な飲食物を紹介した。



死海の水を舐めて驚く生徒達

### [3時限目]

イスラム教の信者がどのような生活をしているかを紹介した。男性用のカブールと女性用のイシャルをかぶる体験をした。アザーンテープを聞き、モスクの様子、祈りの時間、イスラム教が人々の考えと生活にどのように関わっているかを伝えた。また、現地で知り合ったJICAの職員である一人のヨルダン女性の生き方から、「グローバルスタンダード」とは何かを考える機会を持った。この女性は、優秀な経歴の持ち主で、大学を卒業した後は銀行で働くことが夢だった。しかし、銀行で働くにはグローバルスタンダードに基づいて、「イシャル」をとらなくてはいけないと言われ、断念したという経験を持っている。彼女の選択から、何を感じるか、また「グローバルスタンダード」とは何か、どうあるべきかについて考えを交換した。



### [4時限目]

ヨルダンの人々が抱えている問題について考えた。難民キャンプの様子やゴミがどこにでも落ちている状態、出稼ぎ労働者、失業率、都市と地方との違いなどをパワーポイントで紹介した。その後、ODAの説明、青年海外協力隊員としてヨルダンで活躍している隊員、NGOとの連帯協力をしてヨルダンの人々の自立を支援している人々の様子を紹介した。国際協力とは何か、問題解決には何が必要か、また、ODAやNGOの活動について関心があるかなどを話し合い、最後に振り返りをした後で、感想を書いてもらった。

## 生徒の感想から

### a)ヨルダンについて不思議に思ったこと、興味があったことについて

- ・なぜ私達は、「貧しい」などの印象が始めについてしまったかわかりません。
- ・イラクに近いから？アメリカのファーストフード店やスターバックスがあったことに驚いた。ヨルダンの印象が大きく変わった。
- ・思ったよりお店などが多く、住みやすそうな場所に見えた。人々もフレンドリーそうで、なぜ人の雰囲気

がこんなにも日本と違うか不思議に思った。

- ・ 以外と町がきれいに並んでいて平和だと思った。ヨルダンの人々の衣装などがとても興味深い。
- ・ 王様の写真がいたるところにあるのが印象的だった。
- ・ 女性は外に出る時に布をかぶらないといけないのが不思議だった。

#### b) グローバルスタンダードについて

- ・ 世界の人々がみんな理解できるようなルール作りが大切だと思う。
- ・ 礼儀はグローバルスタンダードだと思うし、世界共通でなければならないと思う。世界では、違った考えや価値観を持っている人々がいて当然なので共通のことを理解しあうのは難しい。
- ・ グローバルスタンダードは、良いことも悪いこともある。良いことは、世界の国々が結ばれること。麻薬の使用禁止なども世界共通で良いと思う。しかし、宗教の教えと違うルールを作ってしまうと大変なことになる。
- ・ 宗教など関係なく、皆が同じ人間として守らなければいけない決まりの基準を決めるべきだと思う。
- ・ 人に害を与えること、人の命に関わることはしてはいけないということを世界共通のルールとして守る。
- ・ グローバルスタンダードの基準を何もかも、西側諸国の価値観に合わせているようだ。これは不公平だと思う。
- ・ グローバルスタンダードとは、世界共通の決まりだと思う。アメリカなど西側を中心にしている現在は、時には他国にとっては不便になっていることがある。1つの地域を世界に中心にするのではなく、様々な国の意見や価値観を合わせてみんなに納得のいくものにするべきだ。

#### c) ヨルダンの人々と自分の価値観との違いについて

- ・ ヨルダンの人々にとっては、人とのコミュニケーションや宗教が大切だと思いますが、私はもっと社会的なものが大切だと思う。
- ・ ヨルダンの人々は、宗教とかを気にしなければいけない。それが可哀想だと思った。日本人々は、宗教とか気にしないで自由にできる。
- ・ 宗教に関する考えとか大切さが違う。
- ・ ヨルダンの人々は、時間をゆっくり使う方が良いと思っている。
- ・ ゴミをゴミ箱に捨てないこと、分別をしないことは衛生や環境面で良くないと思う。

#### d) 青年海外協力隊の活動について

- ・ 自分の好きなこと、得意なことを生かしてボランティアできることは、とても良い事だと思った。
- ・ 海外に出て、他国の人々のために協力することはとても良いことだと思う。将来、自分のためにも役立つと思う。
- ・ 海外で人を助けるのは、難しい事だと思う。でも、とても大切なことだと思う。
- ・ 以前住んでいたベトナムにいつか行って、子ども達が夢を持てるようなことをしたい。
- ・ 医療関係の仕事でアフリカに行きたい。子ども達に会って、玩具をあげたり、話をしたりしたい。日本のことも話したいし、子ども達に希望を持たせるようなことを何かしたい。
- ・ 父は、JICAの仕事に関わっている。青年海外協力隊の人にも会っているし友達もいる。人の為や他の国の為に色々するのは、とてもいいことだと思う。

#### 授業を終えての感想・改善点

ヨルダンに対しての生徒達のイメージは「貧しい」「暗い」という印象があったが、実際に映像や話を通して自分達の持っていたイメージとはかなり違うということがわかったようだ。本校はキリスト教主義のため、聖書には親しんでいたが、イスラム教についての知識は全くというほど無かった。今回、イスラム教や、宗教がどのぐらい人々の生活に影響するかを考えることが出来た。また、「グローバルスタンダード」とは何かということ考えることが出来た。実際に現在、この世界を見る時に、西側よりの考えや価値観で世界の基準や起立で物事が成り立っている。世界の人々がお互いに歩みより、受け入れ合うには、世界共通の基準をどこに置くかを考える必要があると思う。

今回、授業を受けた生徒の中には保護者がJICAを通して途上国に滞在していた生徒が2名もいた。この生徒達は、実際に現地で両親が現地の人々のために働いている姿を見ている。最後の授業では、将来

開発途上国に行って人々の自立のために何かしたいかという問いを投げかけてみたが、クラスの半分以上の生徒が、医療関係か教育関係で海外に行ってみたいという感想が帰ってきた。帰国生の一人は、「ベトナムの子ども達は夢を持っていない子どもが大勢いるので、夢を持たせるような仕事を現地でしたい」と言っていたのが印象に残った。帰国子女が多いクラスなので、特にこのような答えが多く返って来たのだと思うが、開発途上国に関心を持ち、将来はそこに住む人々のために何かをしたいと考えている生徒がいることは、とてもうれしい。

今回は地理の教師の協力を得て、高校1年生の地理の時間に授業をしたが、時間があったら更に「難民」についての学びを深めていきたい。高校で教える場合、「国際理解」などの選択授業で扱えると実践も余裕を持って出来ると思った。次年度は、高校3年生の選択授業を通年で持つことになったので、「ヨルダン」を切り口にして「難民」についての学びも深めていきたい。



## ヨルダンに生きる人々

**白岩 真香**

多摩大学附属聖ヶ丘  
中学・高等学校

担当教科:国語  
実践教科:国語  
時間数:3時間  
対象生徒:中学3年生  
対象人数:114名(3クラス)

### カリキュラム

#### (1)実践の目的

ヨルダンに行って感じたことはギャップである。地理的に遠い日本でさえ、レバノンの戦況が連日放送される中、私は多くの人に心配されながらヨルダンに旅立った。しかし、初日。現地深夜。空港からホテルに向かう道すがら私が見たものは、路肩でバーベキューを楽しむ人々であり、深夜を過ぎても飲食店で明るく盛り上がる人々だった。

パレスチナ問題を抱え、イラク戦争の影響を受けるなど、隣接する国家の影響を強く受けているヨルダン。日本ではあまりなじみのないイスラム教を国教とする国。生徒を含め私の中でも、遠い故に、ときどき耳にする「中東」というひとつのイメージに縛られ、そこに生きる人々という視点で何かを考えることはなかった。

すでにパレスチナ問題や難民に関する優れた指導案は多数実践されているが、今回は「国語」として文字を考え、異文化についてふれるとともに、生徒自身が自分とは異なる環境下で生きる人々を想像し、自分自身の生活についても振り返るためのグループ活動を行うことにした。

生徒にあまり馴染みのないヨルダンに対する興味・関心を引き出すこと。また、ヨルダンで行われている日本の国際協力の実際を知ること(この点については進路指導の面でもふれた)。さらにはグループでの話し合いを通じて、生徒自身も多様な意見・背景を持つ多様な存在であることに気づくことをねらいとし、以下のような教材を作成した。

#### (2)授業の構成

事前学習で、3枚の写真をもとにした物語の作成を生徒に課した。そこに生きる人々を想像させることがねらいである。この実践を利用し、実際にヨルダンを視察した際の体験を加え、織りまぜて教材を作成した。

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1限目 テーマ:アラビア書道に挑戦! ねらい:アラビア文字やヨルダン、イスラム教への興味・関心を引き出す。	ヨルダンの民族衣装を見せ、体験させる。 アラビア語と英語の同内容の絵本を見せる。右から読むアラビア語表記、左から読む英語表記、日本と、比較しながら解説する。 アラビア文字、アラビア書道の説明をする。 割り箸で自分の名前を書かせる。	ヨルダンの民族衣装・絵本・カード・割り箸・墨汁・光沢紙・プリント・アラビア語の表
2限目 テーマ:違って当たり前 ねらい:多様な意見の存在に気づくとともに、ヨルダンでの日本の援助について理解する。	ホストファミリーと過ごした様子その他の写真を見せ、語る。 で持った自分の感想を語り合う。そして、自分たちの生活を振り返り、自分たちの中でもさまざまな生活習慣の違いや考え方の違いなどがあることをグループ内で話し合う。 ヨルダンで活躍する協力隊員・専門家・シニアボランティアの方々の活動について解説する。 授業の感想をワークシートに書く。	ホームステイ時、その他の写真 隊員たちの写真 自作ワークシート (メモ・年末お正月アンケート)

3限目 テーマ:物語を作ろう ねらい:そこに生きる人々に 思いをはせる	グループで前時の感想を発表し合うとともに、事前学習でそれぞれが書いた作品を読み直す。グループでイラストをつけた新しい物語・マンガを創作する。	事前学習で書いた生徒作品 画用紙 色鉛筆
--	--	----------------------------

### 授業の詳細

ヨルダンの民族衣装を見て、体験する。

各クラスの国語係(男子生徒のみ)と打ち合わせをし、生徒にもヨルダンの衣装を着てもらって授業に登場した。BGMはアザーン。簡単に挨拶し、ヨルダンについて知っていること、事前学習で学んだことなどを質問し、クイズ形式で授業を始めた。また、数人の生徒には衣装を体験してもらった。

アラビア語表記を知る。

ヨルダンで購入した絵本を各グループに渡す。はじめはとまどっていたが、ごく薄い絵本であり、内容もディズニーの「アラジン」や「ジャングルブック」だったため、題名や奥付を確認し、右から読むことにはすぐ気がついた。同内容の英語絵本を見て、英語嫌いの生徒が「こっちのほうはまだほっとする」とコメントし、受けていた。ホストファミリーの女の子に日本で購入した絵本をプレゼントしたところ、終わりの方から眺め始めたということを伝えた。

日本の横文字表記も、従来の縦書きの習慣に沿った、右から表記するのを見たことがあると生徒が発言してくれた。その後、生徒になじみのある日本語の行書や草書、英語の筆記体などの話題にふれ、アラビア語のカリグラフィーを見せた。ヨルダンで購入したカード類、東京トルコジャーミーの写真など、イスラムの文字文化には生徒も驚き、感動していたようである。

アラビア書道を知り、アラビア文字で自分の名前を書いてみる。

アラビア文字と日本の発音を対照させた表(若干の違いはあるが)を配り、自分の名前や愛称を書いてみた。書道といわれると中国伝来の筆を想像する生徒は、竹でできた固い筆先に驚いていた。

アラビア書道を体験。

鉛筆で練習したあと、割り箸を削って作った筆を使い、アラビア書道を体験した。アラビア語のカリグラフィーで使う筆も希望者に使わせた。語中・語尾で字形がかわってしまうアラビア語にみな頭を抱えながら、楽しく作業を終えた。(http://www.geocities.jp/p451640/moji/skm/gjo/gjo\_09.html 参照)

ヨルダンの様子を知る。ホストファミリーと過ごした時の様子や街中・難民キャンプ・学校の写真を見、ヨルダンに生きる人々を想像する。

ヨルダンで撮影した写真をいくつか生徒に見せた。ここで、事前学習では難民キャンプであろうと推測した写真が、ベドウィンのものであることを生徒に伝え、実際の難民キャンプと比較した。生徒の驚きはかなり大きく、私と同様、少なく偏った情報で固められたイメージが彼らの中に生きていることを実感した。(報道の在り方については、高校3年生で扱った。)

事前学習の際に作った、3・4人のグループを再結成する。人物を撮影した写真を見せながら様子を語る。ホストマザーの妹がレバノンにいること、連日放送される戦禍に心を痛めていること、その反面、レバノンの隣国ヨルダンでは深夜まで多くの人々が屋外で涼み、楽しんでいることなども伝えた。今回の研修でメンバーがさまざまな家庭に滞在できたことは本当にありがたかった。他の家庭の様子も伝えた。人物について考えさせることが一番の目的。また、JICA ヨルダン事務所で近況を少し教えて頂いたので、その点について触れ、民族衣装、難民とされた人々がヨルダンで国民として生活していること、滞在家庭の近所はキリスト教信者の家庭が多かったということ、などなどを写真とあわせて広範囲に語った。詳しく説明できない点もあったが、私が学んできたことを伝え、この段階で各自が考えたこと、感じたことなど、メモを取らせた。

グループで話し合う。

ヨルダンについて興味を持った点や感想を述べ合う。イスラム教は戒律が厳しいと感じていた生徒たちも、地域によってイシャル(ブルカ)のかぶり方が異なること、その人、親の考え方でかぶる・かぶらないそのものについても異なっていたことに驚いていた。女子生徒はおしゃれとして楽しんでいる女性たちに共感したようである。

自分たちの生活を振り返る。きっかけに、各家庭のお正月の過ごし方を考えさせた。同じ日本であっても違う考え方やあり方がある具体例を見ることにより、いろんな考え方や行動をする人が共存していることを実感させた。司会がうまく機能せず、進まないグループには適宜参入し、指導した。

日本とは異なる環境、さまざまな人々が生きる社会で活躍する協力隊員やボランティアの方々について話した。

現地でお話させていただいた方の活動を紹介した。日本の柔道を喜んで練習する子供たちの様子や、ヨルダンの中心である「王立科学院」に、日本の援助で配備された様々な機器があったことなど、さまざまな場面で活躍する日本人の様子は生徒にも印象深かったようである。時間や度量衡といった「基準」を支える日本の機材やシニアボランティアの方々の活躍に感動する生徒も多かった。一番の目玉は本校卒業生のお兄さん、大山氏がカラックの博物館プロジェクトで専門家として働いていたこと。海外で働く人々を身近に感じるにより、将来像が広がった生徒もいたように感じた。

ワークシートに授業の感想を書く。

生徒たちはワークシートに次のような気づきや感想を書いてくれた。

「自分の家とみんなの家のお正月が違っていてもおもしろかった。日本人の中にも違いがあった。」

「宗教も信者の受け取り方によって変わると初めて知った。」(イシャル(ブルカ)のかぶり方のことを踏まえて)

「イスラム教はよく知らなくて怖いイメージもあったけれど、女の人は『守られる』というのはいいい。」

「イスラエルや、他国との関係がかなり気になってきた！」

「意外に自分たちの生活に近いものもあると思った。」

「日本の援助が役立っていることを知った。中国人ではなくて日本人だというと、人当たりが変わるといいう話に驚いた。援助はこんなふうに私たち一般人に返ってくるのだということをはじめて知った。嬉しかった。」

「日本のことももっと勉強したいと思った。」(JICA など日本の支援を学んで)

「他国との関係も必要だと思った。」「ボランティアとか気になる...。」

「ヨルダンは日本とは全くかけ離れたものだと思っていたけれど、意外に近い存在だと感じた。」

このようにこの授業のねらいは概ね達成できたのではないかと考えている。

前の時間の感想を述べ合い、1学期に作成した「ヨルダン～3枚の写真から～」の作品を読みあう。

適当に書いていた生徒、ものすごく飛躍している生徒が(多数)おり、教

室内は騒然となりました。

グループで物語・マンガを創作する。

短編を創作。役割分担を考え、全員の生徒が参加できるよう、写真を利用

したイラストを加えることを必須としました。画用紙4枚程度。最初に書いた作品よりは、ぐっと現実に近づいて考えることができたと思われま

おわりに

当初の予定とだいぶ変わりましたが、「国語」らしさを生かした授業をと考え、上記を考案しました。少し作業が幼いと感じたので今後更に改良した上で、他学年での実施を考えています。

このような研修の機会をくださった JICA、JICA ヨルダン事務所の方々に御礼申し上げます。また、他の先生方の言葉や資料に大変助けられました。ヨルダングループの皆様にも重ねて御礼申し上げます。ありがとうございました。

## ヨルダン Part

### 1. ヨルダンに生きる人々

- ・ 写真&話から分かったこと
- ・ 感じたこと・考えたこと
- ・ 1 番興味深かったこと

### 2. 日本のお正月について話し合ってみて、何を考えましたか？

### 3. 授業を受ける前と受けた後、認識が変わったことはありますか？また変わった人はどのように変わったか教えてください。

### 4. 今日の授業の感想



**柴田 祥彦**

東京都立小平高等学校

## ヨルダンの暦

担当教科: 地理  
 実践教科: 地理A  
 時間数: 2時間  
 対象生徒: 1学年  
 対象人数: 280名(7クラス)

### カリキュラム

#### (1) 実践の目的

ヨルダンを視察して最も印象深かったことは、その地理的位置から西に接するイスラエルからはパレスチナ問題、東に接するイラクからはイラク戦争の影響を受けるなど、隣接する国家の影響を強く受けていること。そして国教であるイスラム教が市民生活の様々な場面に影響を与えていることであった。

すでにパレスチナ問題やパレスチナ難民に関する優れた指導案は多数実践されているため、「週休日は日曜日で、カレンダーの表記は左から」という私にとっての「あたりまえ」がヨルダンで揺さぶられたことを教材の「へそ」とすることにした。そしてヨルダンという国自体や、日本ではあまり馴染みのないイスラム教に対する興味・関心を引き出すこと。また、ヨルダンで行われている日本の国際協力の実際を知ること。さらにはグループでの話し合いを通じて多様な意見の存在に気づくことをねらいとした以下のような教材を作成した。

#### (2) 授業の構成

事前学習として「ヨルダンのアザーン」という授業を行った。これはまず最初に、イスラム教を国教とするヨルダンにおいて、非イスラム教徒がモスクから礼拝を呼びかける大音量のアザーンがうるさいので何とかして欲しいとの架空の訴えに対して、実際のヨルダンの裁判制度とは異なるものの「裁判員」になったつもりでその訴えに対して和解案を考えさせた。続いて今度は遠い国のことではなく身近なところで同様な問題が起こった場合を考えさせた。すなわち、日本の団地に在日ヨルダン人が集住するようになり毎朝アザーンを流すようになった。このアザーンに対して団地や周辺に住む日本人からアザーンがうるさいとの訴えがあったと仮定して、その和解案を考えさせた。

この時からの大きなテーマは「多数派と少数派は、どのように折り合いをつけていけばよいのか？」というものであり、その大きなテーマと実際にヨルダンを視察した際の体験を混ぜて教材を作成した。

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 限目 テーマ: ヨルダンのカレンダー ねらい: ヨルダンやイスラム教への興味・関心を引き出す。	ヨルダンのカレンダーを見せ、日本のカレンダーと違う所を探す。 右からのアラビア語表記、祝日の差異、週休日が金曜日であることを日本と比較しながら解説する。 ヨルダンでの週休2日を何曜日にすべきかを、周辺アラブ諸国の週休日を参考にしながらまず個人で考える。	ヨルダンのカレンダー  アラブ諸国週休日マップ
2 限目 テーマ: ヨルダンの週休二日制 ねらい: 多様な意見の存在に気づく。 ヨルダンでの日本の援助について理解する。	誕生日順に一列に並んでもらい5人のグループをつくり、 で考えた自分の考えをグループ内で発表してから、グループとしての週休2日案を話し合う。 各グループのグループ名とともに、週休2日案を黒板に書く。 各グループはどうしてそのような週休2日案にしたのかを説明する。 ヨルダンの時間を支える「王立科学院」とそこで活躍するシニアボランティアやその活動について解説する。 ワークシートに授業のまとめを書く。	現地で撮影した写真

## 授業の詳細

ヨルダンのカレンダーを見せ、日本のカレンダーと違う所を探す。

ヨルダンについては事前指導で「ヨルダンのアザーン」を実施し、アザーンクロック(アラームがイスラム教で礼拝を促す声であるアザーンになっている目覚まし時計)に驚いていたため、生徒たちは「あぁ、あのヨルダンね」という反応であった。

まず最初に訪問先の学校の校長先生にいただいたカレンダー(右)を見せ、日本と違うところを3つあげるように指示した。しかしカレンダーはそれほど大きくないため、必要箇所をスキャンしてプリントにも載せておいた。

السبت	الأحد	الاثنين	الثلاثاء	الأربعاء	الخميس	الجمعة
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

右からのアラビア語表記、祝日の差異、週休日が金曜日であることを日本と比較しながら解説する。

「えっ日曜日が金曜日になっているの!？」と反応した生徒もいたため、生徒たちには馴染みのない週休日という言葉を教えた。そしてイスラム教は金曜日、ユダヤ教は土曜日、キリスト教は日曜日という宗教による週休日の違いを解説した。

また、ヨルダンの祝日を紹介し、そのうちイスラム教関係の祝日を取りあげ、イスラム教を国教としているヨルダンと、政教分離の憲法を持つ日本と祝日の意味の比較を行った。この時、現在の文化の日が明治天皇の誕生日であることを知らない生徒が多数なのは予想できたが、2006年まで「みどりの日」であった4月29日が昭和天皇の誕生日であったことを知らない生徒もあり、彼らが平成生まれだということに改めて気づかされた。またこの時余談として、では大正天皇の誕生日はいつだ?とふってみたところ、話が大きいに盛り上がり授業は大きく脱線していくのであった。(ちなみに8月31日です)

続いてアラビア語の表記が右からはじまっていることについて触れ、ヨルダンのテレビでは文字テロップがどちらから流れてくるかを考えさせた。

### ヨルダンの祝日(2005年)

1/1 元日 1/21 犠牲祭 1/30 国王誕生日 2/10 イスラム暦新年  
 4/21 預言者ムハンマド誕生祭 5/1 メーデー 5/25 独立記念日  
 6/9 国王即位記念 6/10 アラブ民族統一の日 9/12 ムハンマド昇天祭  
 11/14 フセイン前国王誕生日 11/14 ラマダーン明け休暇

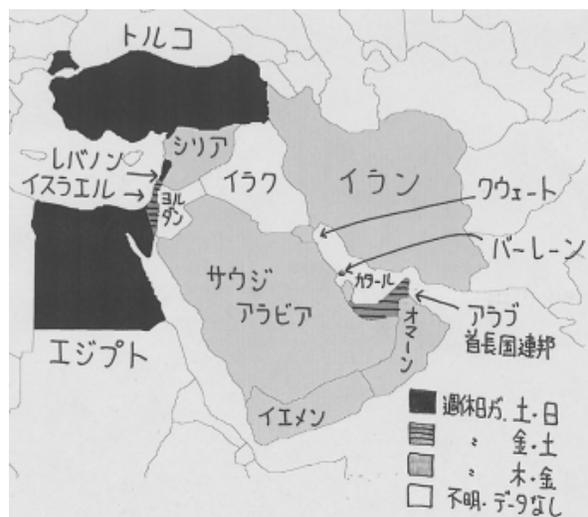
ヨルダンでの週休2日を何曜日にすべきかを周辺アラブ諸国の週休日を参考にしながらまず個人で考える。

現在ヨルダンは、金・土が週休日となっているが、その事は教えず、現在金曜日のみが週休日となっているという

仮定で考えてもらった。

この時プリントには次のように課題を示した。

「現在ヨルダンの休日はイスラム教の休日である金曜日となっています。(ホントは違いますけど、シミュレーションということで...)しかし世界的な週休二日制の普及を踏まえ、ヨルダンも週休二日制を導入することとなりました。周辺諸国の週休日分布図を参考にしながら、ヨルダンの週休日を何曜日に何曜日にすればよいのか考えてください。なお、その際必ず、なぜその様な週休日にしたのかという理由を明記してください。」



誕生日順に並んでもらい5人のグループをつくり、 で考えた自分の考えをグループ内で発表してから、グループとしての週休2日案を話し合っ決めて決める。  
 参加型学習はこれが初めてではないので、多くのグループはじゃんけんなどで司会者を決めて話し合いを始めていたが、中には口火を切る者がおらずお見合い状態になっているグループもあったので、適宜指導し話し合いを促した。

各グループのグループ名とともに、週休2日案を黒板に書く。  
 なぜそのような週休2日案にしたのかという理由が、この授業の「へそ」なので理由は書かせず、週休2日案のみを書かせた。

各グループはどうしてそのような曜日にしたのかを説明する。  
 これらの結果をまとめると以下ようになる。

グループ名	あとかしかいない	Donde esta la estacion?	失恋しても Loving you
週休2日案	金・土	金・土	木・金
その理由(要約)	連休だと遊びやすいし周辺諸国は土曜日が休みなので	礼拝する金曜日ははずせない、連休だとenjoy できる	周辺諸国に合わせると経済が活性化するはずだから
ジャイアンツ	KFC	匿名希望	無名
木・金	月・金	金・土	金・土
ももとの休みの前に休日を入れて連休にすべきだ	5日連続で働きたくない。休みの分散は負担が軽い	周辺諸国と1日ずつ重ね、近隣諸国との間をとった	隣国と休みが重なるのは遊びに行きやすく経済に良い

「ではヨルダンの週休日はどうなっているのか JICA ヨルダン事務所の方に聞いてみましょう」と携帯電話を取り出したところで「あっそっか、時差を考えてなかった」と言って携帯をしまうというパフォーマンスもしてみた。

そして実はヨルダンは金・土が休みなのだということを解説した。そして 2006 年 9 月からバーレーンとアラブ首長国連邦が、グローバル化に伴って欧米諸国との取引を重視したためという理由で週休日を木・金から金・土にかえたことを解説した。生徒たちの中には週休日の決定にあたって経済にポイントをおいたグループもあったが、それは近隣諸国であって欧米諸国ではなかったため、これら 2 国の事例は生徒たちの関心をひいた。

ヨルダンの時間を支える「王立科学院」とそこで活躍するシニアボランティアやその活動について解説する。

ヨルダンの標準時を管理している「王立科学院」には、日本の援助で配備された様々な機器があったこと。そしてそこでは時間や度量衡といったヨルダンにおける「あたりまえ」を支えるシニアボランティアの人たちの活躍していることを紹介した。

ワークシートに授業のまとめを書く。

生徒たちはワークシートに次のような気づきや感想を書いてくれた。

「色々な考えやおもしろい考えがたくさんあったので自分の考えとちがっていておもしろかったです。」

「国によって休日が違うことを初めて知った。」

「見えないところでも、日本の援助が役立っていることがあったのを初めて知りました。目に見えるものが「援助」というイメージが変わった。」

このようにこの授業のねらいは概ね達成できたのではないかと考えている。来年は2時間ではなく、1時間で出来るようにコンパクトにまとめたものに改良し、引き続きこの授業を実施していきたいと考えている。

おわりに

当初実施したクラスでは週休日案を自由に考えさせずに、A候補(木・金) B候補(金・土) C候補(土・日)を一人三役で演説した上で投票させるという教材をつくったが、B候補の圧勝に終わり盛り上がらなかったため、後半のクラスでは上記のように改良したことをつけ加えておきます。

このような研修の機会をくださった JICA、とりわけお世話になった JICA ヨルダン事務所の方々にこの場を借りて御礼申し上げます。また我が儘な私を暖かくつつんでくださったヨルダングループの皆様にも重ねて御礼申し上げます。